

10年ぶりにNoism2に振付をする。2月に入るまではそのつもりもなく、今年はレパートリーの組み合わせで行こうと考えていたのだけれど……

ゲスト振付家の場合、振付家は限られた情報（共有した経験の少なさ）に基づいて、舞踊家に“合わせて”振付をする。その良さを引き出すことを最優先に考える。それは限られた時間の中で舞踊家の力を最大限発揮する上で、効果的かつ必然的な選択である。しかし若い舞踊家にとっての課題は、他者の為に創られた振付を、如何に自らのものにできるか“にも”あるのだ。

クラシックバレエのように振付が同じ場合は実演の質が顕著に現れるし、自他共に評価も定まり易い。しかし現代舞踊ともなると、そもそもの評価軸が曖昧な上に、上述したような戯曲で言うところの当て書きならぬ当て振りが横行するので、その課題に直面する機会がとても少ない。

私はこれが若い舞踊家の成長を妨げている一因であると感じている（少なからずNoismでは）。だから、今回はレパートリーの実演だけで十分だと思っていた。しかし、日々若者たちと稽古を共にし、彼らの身体、その精神状態を見つめながら不安になってきた。このままだと昨今流行りの「踊ってみた」で終わるのではないだろうか、と。

小品でもいい、彼らの課題克服に繋がるような振付を、彼らがすでに持っている（自覚している）力ではなく、彼らの潜在能力を引き出すような振付をした方がいいのではないだろうか、と。勿論、演出振付家にとって自らの演出振付が触媒となって、舞踊家が驚くほどの変貌を遂げることほど、冥利に尽きることはない。しかしそれは真剣勝負、どちらかが奉仕するような姿勢では成し得ない。覚悟は決まった。それを目指す。

Complex “衝動・欲求・観念・記憶等の様々な心理的構成要素が無意識に複雑に絡み合って形成された観念の複合体をいう”

その複合体こそが身体、すなわち舞踊家なのである。



Photo : Kishin Shinoyama

金森 穰 Jo KANAMORI

演出振付家、舞踊家。りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館舞踊部門芸術監督、Noism 芸術監督。17歳で単身渡欧、モーリス・ベジャール等に師事。NDT2 在籍中に20歳で演出振付家デビュー。10年間欧州の舞踊団で舞踊家・演出振付家として活躍後帰国。04年4月、日本初の劇場専属舞踊団 Noism を立ち上げる。平成19年度芸術選奨文部科学大臣賞、平成20年度新潟日報文化賞、第60回（2018年度）毎日芸術賞ほか受賞歴多数。

www.jokanamori.com Twitter @jokanamori